

玖珠郡の産業の礎を築いた偉人

農業水利
偉人伝⑥

あそう かん ぱち 麻生 観八

父祖が一生を捧げても
果たせなかった
「右田井路」の完工



右田井路 (当初は舟来井手と呼ばれていた) 九重町

右田井路は筑後川の上流玖珠川から取水する農業用水路で、大分県九重町右田地区の水田約100haを潤しています。着手から約50年を経て、明治40年に総延長14kmで完成しました。祖父、父、そして観八と想像を絶する苦闘の年月を経て完成したこの水路によって、右田地域の水田には今でも豊富な水がとうとうとそそがれています。

麻生観八の「ことば」

実に遠大の事業は
年を経て初めて其の功果相顕れる。
悲観は人生に如何なる場合も禁物だ。
農村開発こそ自己の天職なり。



「水源涵養林」の造成や「畜産業の振興」
など農村開発に多大の貢献
1865年1月10日(慶応元年)生まれ～
1928年8月2日(昭和3年) 没年63歳

| 年号 | 元号 | 年齢 | 出来事 |
|--------|--------|----|--|
| 一八六〇年代 | 文久年間 | 0 | 祖父東江、父豊助 水田の水不足を解消するため、溜池を掘る 一月十日、日田、豆田 酒造業草野丈右衛門の五男、観八誕生 |
| 一八六五年 | 慶応元年 | | 日田県令の許可下りる |
| 一八七〇年 | 明治三年 | 5 | 東江、豊助、右田井路開削着工 |
| " | " | 5 | 十一月、雑税廃止の百姓一揆・工事中断 工事再開(資産家から資金借入) |
| 一八七二年 | 明治四年 | 6 | 日田県が大分県に併合 |
| 一八七三年 | 明治五年 | 7 | 一部通水見るも不完全 工事中断 |
| 一八七七年 | 明治九年 | 11 | 東江、家宅、田畑、酒造権等を売却する |
| 一八七八年 | 明治十一年 | 13 | 観八、麻生家に養子として入る |
| 一八八〇年 | 明治十三年 | 15 | 東江、豊助、再着工(大分県庁に実測願い) |
| 一八八三年 | 明治十六年 | 18 | 一応の通水を見るが、漏水など不良箇所が続出する |
| 一八八五年 | 明治十八年 | 20 | 観八、家業の酒造業を再興、長男益良誕生(四代目) |
| " | " | 20 | 豊助他関係者、水路の権利を橋爪家に譲渡、 |
| 一八九二年 | 明治二十五年 | 27 | 東江、豊助、工事中止となる |
| " | " | 27 | 観八、東飯田村村会議員に立候補、初当選 |
| 一八九六年 | 明治二十九年 | 31 | 日清戦争勃発 |
| 一八九七年 | 明治三〇年 | 32 | 観八が橋爪家から水利権を買い戻す |
| " | " | 32 | 「井路開削工事再興」 |
| 一九〇〇年 | 明治三三年 | 35 | 右田井路水利組合設立 |
| 一九〇三年 | 明治三六年 | 38 | 郡会議長になる |
| " | " | 38 | 東江逝去、七七歳 |
| 一九〇四年 | 明治三七年 | 39 | 日露戦争勃発 |
| 一九〇七年 | 明治四〇年 | 42 | 右田井路完成 |
| 一九〇八年 | 明治四一年 | 43 | 豊助逝去、六二歳 |
| 一九一一年 | 明治四四年 | 46 | 九州水力電気(株)設立 監査役就任 |
| 一九二四年 | 大正三年 | 49 | 第一次世界大戦勃発 |
| 一九二九年 | 大正八年 | 54 | 久大探鉱設の法案 国会可決 |
| 一九三五年 | 大正十四年 | 60 | 東飯田畜産会創設 |
| 一九三六年 | 大正十五年 | 61 | 全国的大干魃 「先祖英霊譚日」 |
| 一九三七年 | 昭和二年 | 62 | 観八、玖珠美業銀行取締役頭取に就任 |
| 一九二八年 | 昭和三年 | 63 | 観八、逝去(八月二日) |

右田井路開削の歩み

麻生観八の功績と井路開削

麻生観八は祖父、父が未完で遺した農業用用水路を同志とともに開削するとともに、地元産業界に偉大な足跡を残しました。

観八は、1865年(慶応元年)に、大分県日田の裕福な商家(父:草野丈右衛門寿六)の五男として生まれましたが、12才の時に実家が倒産したため、15才の時(1880年明治13年)に、家業が同じ酒造業であった九重町の麻生家(叔母の嫁ぎ先)の養子となりました。しかし、その家は水路工事によって財産を失いすっかり家業も傾いていました。

観八は、麻生家で家業(酒造業)を再興し、先代が中断させていた水路工事を完成に導きました。

観八の数多い社会的な仕事の始まりが右田井路の開削事業です。

観八が61歳の時(大正15年)、全国的な大干ばつがありました。右田井路関係者は、豊富な水で干ばつと無縁でした。そのため、農民の代表は、感謝の意を麻生家に伝え、感動した麻生観八は、そのことを板に墨書し、水路工事に苦心した先祖の霊に報告(謹白)しました。



右田井路開削の端緒

玖珠郡右田村は500余戸を有し、土地は肥沃ではありましたが、水利の便が悪く、わずかの畑作(麦・粟の類)では生産が上がりませんでした。稀に水田があっても天水掛かりのため、用水不足によって干害を破り、幕政の頃からは村民の疲弊は一層厳しくなり、離農、転住が日増しに増えました。(幕末には180戸まで減少しました)

右田村の疲弊を救うため、村長の麻生寛蔵、麻生東江(祖父)、豊助(父)が農業用水を確保するために奥野原台地に2つの溜池を作ったことに始まります。しかし、集水量が少なく、十分な貯水量を得られませんでした。

その後、麻生寛蔵、東江、豊助は村役の人々と協議して、玖珠川から直接取水する新水路の開削を決定しました。

未完の工事

明治3年に地元代表者と東江、豊助は日田県知事松方正義の許可を得て、水路工事に着工しましたが、行政からの資金援助は無く、地元資金と開削後の増収による地元分担金を当てにした計画でした。

実際に工事に掛かってみると、トンネル部分の地質が固かったことや測量ミスでトンネルがずれてしまうなど、予想外の難工事になりました。明治6年には一部に通水を見ましたが、予期した水量がありませんでした。

井路関係者は賦役と負担金の納付に応じず、地元責任者の中に破産する人まで出てしまいました。

明治11年、東江は酒造権をはじめ、家財・田畑・山林など井路関係資金の債権にあて、隠居宅に蟄居、豊助は出奔しました。その後、再度起工を計画しましたが徒に年が過ぎるばかりでした。

明治16年、県に実測調査を申請して再び着工し、明治18年に一応の通水を見ますが、次々に不完全な箇所から漏水が起こり、またしても完成には至りませんでした。

そして、井路の権利についても手放すことになり、野上村の橋爪氏に3,000円で譲渡しました。さらに酒屋も廃業し、明治25年には右田井路の建設は完全に途絶えてしまいました。

どうか井路だけは完成させてくれ。これがおまえに対する一生の頼みだ。



井路は完成してお目に掛けます。私の命の有る限りやるつもりです。どうぞ、ご安心ください。

エピソード1

幼少時代

代々日田で酒造業を営む草野丈右衛門の五男として、慶応元年一月十日に誕生しました。

草野家は日田きつての豪家であったが、親八が12歳の時、丈右衛門が相場に失敗し、酒屋を廃業し没落しました。

酒屋に生まれながら、破れ徳利を下げ、2銭銅貨を持って酒買いに行くはめとなりました。子供心にも胸の痛手を受けましたが、なんとかして昔の家運を挽回せねばならないと堅く胸に誓いました。



エピソード2

玖珠の麻生家(明治13年、養子となる)

麻生東江は家内の甥にあたる観八を養子にと草野家に申し入れました。

さぞ良家であろうと想像して行った観八でありましたが、麻生家は水路工事に資産を投じたために、わずかな土地と人に貸した酒蔵が残る程度の有様でした。

養父豊助の弟良策が酒造業を営んでいましたので、観八は再び奉公に出ることになりました。

ところが、その酒造場が火災で廃業になってしまい、その後、観八は役場や小学校で働きながら、家業再興の準備をしました。明治18年、その苦勞が実り日田豆田の角倉庄平氏から酒造権の譲渡を得ることができました。

井路開削成功

観八は家業の基礎堅めも出来つつあった明治33年に、祖父東江、父豊助の右田井路開削の遺業を継続する決心をしました。

まず、水利権の買い戻しを橋爪氏に申し出たところ、親孝行な観八に感心した橋爪氏は快く申し出に応じ、しかも金利は一切取らずに3,000円のままで譲渡してくれました。

また、井路開削は組合組織で運営したいと考えていたため、橋爪氏に仲介役を依頼し、井路関係者で水利組合を結成し、事に当たることになりました。併せて、県に起債の申請をしました。

しかし、青年観八が後から高い水利使用料を取るつもりではないかなどと、有らぬ噂を流す者たちが現れ、反対者の説得などに時間を要すなどし、起債認可が下りるまでに8年の歳月を要しています。この間に、水利権を買い戻すために勸業銀行から借り入れた3,000円は返済金利が膨らみ、6,000円に倍増していたとのことでした。

明治40年、遂に祖父からおよそ50年の歳月をかけた 右田井路の開削工事がようやく完成

水路が開通した後、観八は水利権の主張をせず、井路の権利と金1,000円を水利組合に寄付しました。農民達が、麻生家にちなんだ水利組合名をつけようとしたのですが、これを固辞し、水利組合は右田井路普通水利組合と命名されました。井路の完成により、かつて天水頼みで干ばつに悩まされた地域から豊富な水量に恵まれた農業地帯となりました。

その後、観八の後を継いだ4代目益良は昭和9年、橋爪安彦氏と協議し、右田井路の改修工事に取り組みました。

県から救済事業の施行認可を得ることができ昭和10年に竣工しました。これにより、完全な水路の機能が完成しました。益良は観八の後継者として、多くの遺業を引き継ぎ、業績を残しました。

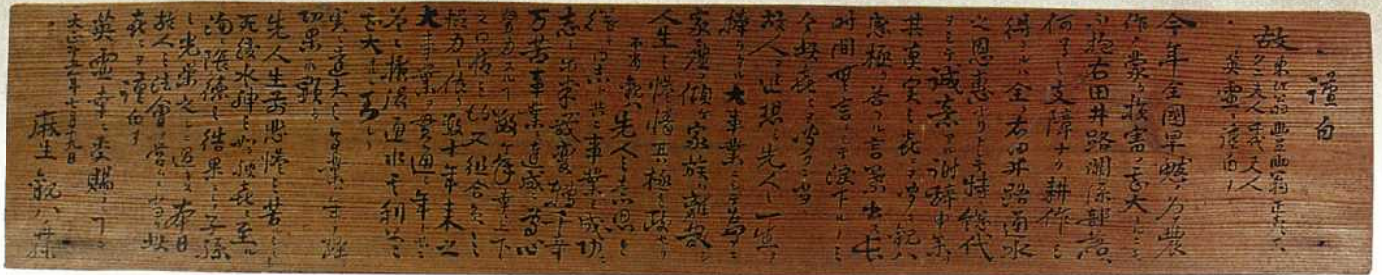
産業開発は自己の天職 畜産振興

観八は玖珠郡農会長、大分県農会副会長、帝国農会議員など農業政策上の重職を歴任しています。特に興農殖産事業に心を傾注し、「玖珠の山村を、広くは日本の農業を開発振興せねばならぬ」、農村開発こそ自己の天職と考えていました。

大正14年に東飯田畜産会を創設し、牛馬の改良普及や繁殖奨励に努め自ら数千円を寄付し、優良な種畜を購入し、これを無償で村民に提供したり、優秀な講師を招いて生産技術の研鑽を重ねるなど畜産業の発展に尽力しています。このため、全国畜産共進会で優秀な成績を獲得するなどして、全国に玖珠牛の名声を高めました。現在でも、玖珠地域の畜産業は県下のトップレベルにあります。



玖珠牛「多喜山」号



右田井路による稲作豊饒に対して先代への感謝の祭文(親八が板に自筆で墨書しました)

謹白

故東江翁、豊助翁、正彦君、クニ夫人、千代夫人の英霊に謹白す。

今年全国早魃の爲め、農作に蒙る損害甚大なるに不拘、右田井路関係部落は、何等支障なく耕作し得たるは、全く右田井路通水の恩恵なりとして、特に総代をして誠意ある謝辞申し来たり、其の眞実の喜びを聞き、親八感極まりて答える言葉出です。長時間無言にして涙下るのみ、今此の喜びを聞くに当り、故人を追想す。先人の一生を捧げたる大事業にして爲めに家産を傾け、家族は離散し、人生の惨情其の極となれり。不肖親八は、先人の意思を継ぎ同士と共に、事業の成功を志し、爾来幾變転、千辛万苦、事業の達成に専心努力すること数年。幸いに上下の同情を得、又組合員の協力により、数十年來の大事業を貫通し、年と共に益々拡張、其の利益甚大なるに至れり。実に遠大なる事業は、年を経て初めて其の効果顕る。

先人生前悲慘の苦しみも、死後は水神の如く喜ばるるに至る。洵に陰徳の結果にして、子孫の光栄、之に過ぐるものなし。

本日、故人の法会を営むに当り、この喜びを謹白す。英霊幸に受け賜はらんことを。

大正十五年七月十九日

麻生 親八 再拜

松岡公園に移築された当初の水利施設



建設当時の水門

右田井路の概要

水路の頭首工は野上深瀬に有り、野上川から取水している。岩盤やトンネル部分が多く、掘削に多大の労苦を要したことを物語っています。また、当時の測量は口ウソクを利用するなどしたものであったため、精度に課題がありました。



1. 取水口(野上深瀬)

舟来堰(頭首工)により野上川から取水
青野山山麓を縫うように延長13,951m



2. 素堀トンネル

山に沿って水路を掘っているために
素堀のトンネル部分が非常に多い。



3. 尾本上付近の水路状況

堅固な岩盤に沿うように水路が続く。



5. 通水橋上部

堅固に石積みが施されている。



4. 右田井路通水橋(明治38年完成)

橋長 10.3m 橋幅 3.3m



6. 通水橋遠景

通水橋の向こうに「九州横断自動車道」
の橋脚が立っている。



7. 柿木原付近

県営ため池等整備事業(平成17~19年度)によって一部改修工事が施工された現在の水路

麻生観八 功績・足跡

久大線の誘致

観八の育った玖珠郡は高い山々に囲まれた地域で交通が不便でした。このため、世の中の進歩から取り残されることを心配した観八は鉄道の敷設が必要と考え、大正10年、45歳の時に九州横断鉄道の敷設運動に乗り出しました。

しかし、反対者の説得や促進活動は難航を極め、国会での敷設決定までに30余年の歳月を要しました。大分・久留米間の全線が開通したのは昭和9年でしたが、観八は全線開通の6年前に世を去っています。



九州水力電気株式会社と水源涵養林造成

明治40年代は国の経済が活況期に有り電力需要が増加していました。水力発電を行う九州水力電気(株)が明治44年に設立され、観八は監査役に就任しました。(現在の株式会社九州電力)

河川の水利権は明治の初期までは農業用水が主体でありましたが、電力需要とともに産業用水利権の取得についても競争が激しくなりました。このような水利権の調整にも力を発揮しています。

水力電気の基礎は何といっても水源を養うことにありという信念をもっていた観八は水分峠一帯の湯布院や飯田高原に植林を提案し、九州水力電気が約4,000haを植林しています。

祖父東江も飯田高原に植林をする夢を抱いていましたが実現させることが出来ませんでした。観八は祖父の緑化推進の夢をここでも完遂しています。

学校設立(実業教育および女子の高等教育に貢献)

地元の産業開発には実業教育が急務として、明治44年に農業教育を中心とした玖珠郡立実業学校の設立に寄与しました。(現在の県立玖珠農業高校)

また、玖珠郡の発展には女子教育に力を入れる必要があると考え、高等女学校の設立を推進しました。(玖珠郡立森高等女学校・大正11年設立、現在の県立森高等学校)

地場企業としての礎を築く

祖父東江が興した酒造業は右田井路の開削の行き詰まりによって中止を余儀なくされました。

観八はこの家業再興に成功し、右田井路開削に着手することが出来ました。

玖珠郡九重町の豊かな自然の中で育まれた清酒「八鹿」は140年の歴史を刻み、大分県を代表する銘柄として、現在に引き継がれています。

銅像祭

毎年、5月10日に観八翁の遺徳を偲ぶ銅像祭が、地域の人々が集い開催されています。

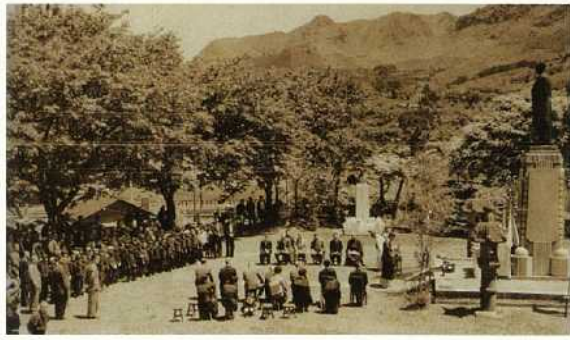
麻生観八翁の銅像碑文(略)

麻生観八翁は、義理がたく、仕事に精進し、俟約をし、家を再興して思想の善導、自治の発展に尽力され農業、教育、交通、福祉などの公共に多くの資金を投じて、よく務めよく励んで、自分が衆の先頭に立つて模範を示されました。

右田井路の開発や、久大線の敷設などは、実に翁の永年にわたり真心込めた偉業です。これらのことで当時民間としては稀な藍綬褒章を受けておられます。「人生棺を蓋うて事定まる」と申します。

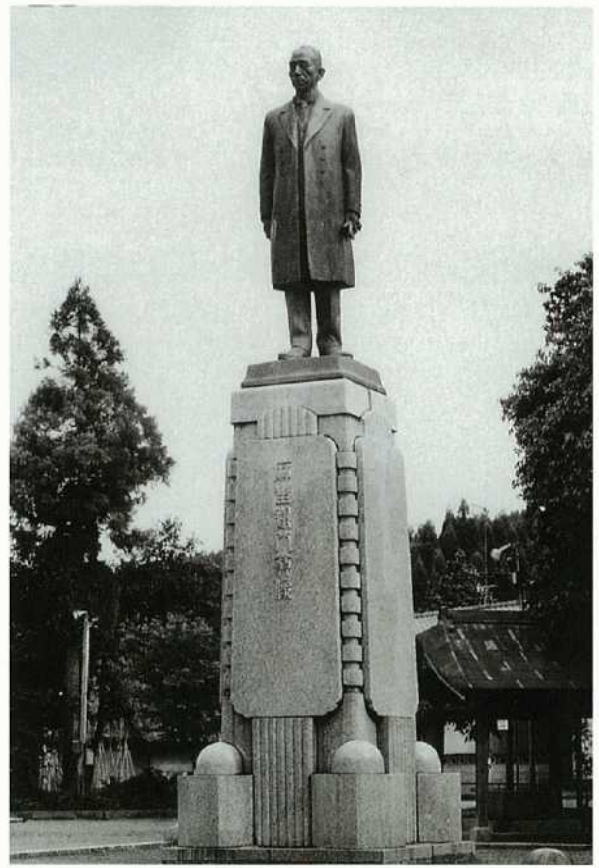
翁の敬い慕う多くの人々が浄財を出して、東洋のロタンと云われた県出身の朝倉文夫先生の手による銅像を建立し翁の遺徳を偲ぶつとされました。

奉賛会



4代目 麻生益良像

松岡公園に観八像と一緒に立っています。



麻生観八像

銅像は彫刻界の巨匠朝倉文夫の手によるもの
(昭和4年建立)